



日本の名人

【番組】

解説／相羽秋夫

*

落語／笑福亭三喬

講談／一龍齋貞水

中入

浪曲／春野百合子

漫才／横山ホットブラザーズ

2007年9月29日【土】15:00

茨木市市民総合センター クリエイトセンター・センターホール

◆主催：(財)茨木市文化振興財団 ◆制作：三栄企画 ◆構成：相羽秋夫



大阪府文化振興基金
Osaka Prefectural Fund
for The Enhancement
of Cultural Activities

当事業は「大阪府文化振興基金」による事業です
大阪の未来をひらく「大阪府文化振興基金」に皆様のご協力を
寄附のお申し出、ご相談は大阪府生活文化部文化課まで
06 (6941) 0351 内線4821

本物の「芸」をたっぷりと・・・

相羽秋夫 (演芸評論家
大阪芸術大学教授)

「芸術」には、絵画や彫刻のように物で表現する領域と、演劇や音楽のように演者の体で表現する分野がある。

体現する芸域を「芸能」と称する。そして、わが「演芸」も、この「芸能」を支える重要な柱として、昔から多くの人々に喜ばれてきた。

しかし、どの芸域も上手な演者と下手な演者が居て、前者を「名人」と呼ぶ。

今回の企画は、「演芸」の世界で「名人」と称賛されている演者を一堂に会して、これぞ「日本の名人」だと、自信を持って推薦出来るものである。

では「名人」とは、どういう人であろう。ずばり、同じ演技を何回鑑賞しても、納得のいく芸が出来る人のことである。

本物の芸は、繰り返し効くものである。それを当然のように演じ切る人、それが「名人」である。

このような企画は、そうそう実現出来るものではない。

永年の準備期間を経て、やっと今回の開催の運びとなった。

この機会を絶対見逃さないよう、はじめにお願いして話を進めたい。

□

今回ご披露する「落語」「講談」「浪曲」「漫才」の四つの分野は、一見別々の歩みをしてきたように見えるが、実はその源をたどっていくと一つの所に行き着く。

それは、「仏教」である。

仏教を布教するための説教師の中で、「絵解き説教」という、今日で言う紙芝居のように、絵を前にして名調子で説教した話芸が「神道講釈」などと結びついて「講談」という芸域を作り上げた。

また、「節談説教」と言って、節を付けて説教した布教師の話芸が、江戸時代に祭文や音頭をはじめとするさまざまな節を統合して浪花伊助という人が、「浪花節」を創り出した。それが「浪曲」として命脈を保っている。

さらに、「落語」は、登場人物を多少斜に描き、咄の最後に必ずオチのある話芸、「落とし咄」が生まれ、「落語」と呼ばれるようになった。京都・誓願寺の住職、安楽庵策伝によって産み出された。

「漫才」は、全国各地に点在した「萬歳」が、その源流である。とりわけ尾張や三河の萬歳が、大きく影響している。それは、仏教の經典に節付けしたことが最初と言われる。その「萬歳」が、寄席で演じられたときに「万才」となり、昭和の初期に「漫才」と表記されるようになったのである。

□

いよいよ「名人」のご紹介である。東京より来演の六代目一龍齋貞水は、「講談」界史上初の人間国宝である。

東京都の生まれ。高校時代に五代目一龍齋貞丈に入門して貞春。永い間下積みの修行の末に大きく花開いた苦勞人である。夏場に怪談講談でも活躍している。

迎え打つ上方「浪曲」界の第一人者は、二代目春野百合子である。

二代目吉田奈良丸、初代春野百合子を父母に持つ毛並みの良さは、芸に品格を持たせている。宝冠章、紫綬褒章など、大きな賞を総なめにしてきた実力者である。「文芸浪曲」という新分野を開拓した。

数少なくなった音楽「漫才」のリーダーは、横山ホットブラザーズである。

マコト、アキラ、セツオの三人は実の兄弟で、チームワークの良さが身上だ。かつては父の東六が率いていたが、死後現在のようなスタイルになった。文化庁芸術祭賞をはじめ、漫才に与えられる賞の全てを手中にしている。

これらの三組の名人の前座をつとめるのは、「落語」の笑福亭三喬である。

芸術祭優秀賞、上方お笑い大賞優秀技能賞など、将来名人の座に近づくに十分な才能を持っている逸材である。

《敬称略》